

片側顔面痙攣（けいれん）・眼瞼痙攣

目の下や周りがピクピクするのが疲れたときに 2・3 日くらい続くのはほぼ誰もが経験することですが、これが慢性化して口元や頬にもひろく生じるあるいはひどい時は片目がつむってしまったり顔が歪んでしまったりすることがあります。こうなると日常生活上で不便・不快であることより治療の対象となります。当院では片側顔面痙攣に対して内服やボツリヌス注射療法（ボトックス）、必要あれば本院の脳外科と連携して手術療法も行っています。

また似たような症状で両目が勝手にふさがってくる、光が眩しい・TV は音しか聞かない、まぶたがふさがって目が開かないのでモノにぶつかるといった症状が生じる眼瞼痙攣（がんけんけいれん）があります。比較的多めに注射が必要なことありますがこちらもボツリヌス療法が有効なことが多いです。私は 1996 年に認可された時から携わっていますので伏見稲荷の山頂一周コースを歩くときになんとなく眼力社で蠟燭を奉納する習慣がいつのまにか出来てたりします。妥当かどうかはわかりませんが自分の中ではここは諸星大二郎作品に出てくる「眼光娘娘」イメージとも重なっていたりもします。

痙攣性斜頸（頸部ジストニア）

首や肩の筋肉に勝手に力が入ってしまって頭の向きや傾きに異常が生ずる病気です。頭が前や後ろを向く、頭がふるえる、横を向いてしまって正面を向きにくいなどといったことになります。また頑固な肩凝りや首凝りが実は痙攣性斜頸であるということもあります。当医は 2000 年に痙攣性斜頸に対しボツリヌス治療が認可されて以来この治療に従事しております。

局所性ジストニア

「書痙」「音楽家のジストニア」など

手の麻痺はないのに「字を書くときだけ手がこわばって自由に動かせない」「長年ピアノ弾いていたが最近は特定の手指がこわばるあるいは手全体がフリーズする」など特定の動作がなぜか出来ないという症状があります。いわばパソコンやスマホで特定のアプリがバグるような症状です。管楽器演奏時に口元がおかしいというパターンもあります。内服治療の他に必要あれば定位脳手術を専

門とする脳神経外科施設と連携しております。

脳卒中後の痙縮

脳卒中を始め脊髄損傷や脳性麻痺によって筋肉が緊張しすぎて、手足が動きにくくなったり勝手に動いてしまう状態を「痙縮（けいしゅく）」と呼んでおります。具体的には、手指が握ったままの状態が開きにくくなったり、肘が曲がったり足関節が内反したり尖足が生じたりします。これらの痙縮に対して 2010 年秋にボツリヌス注射療法が認可されました。筋肉をやわやらかくし関節の可動域を広げることで日々の生活をなにごしか快適なものに出来たりあるいは介護がしやすくなったりが期待出来ます。どの程度お役に立てるかはケースバイケースですのでお気軽にお問い合わせください。

腋窩多汗症

前に居た柳馬場武田クリニックで初めて施行したのですが腋窩多汗症のボトックス治療は需要が思ったより多かったです。塩小路クリニックでも引き続き受け付けております。最短インターバルは 16 週間ですが年に 1-2 回という方が多い印象です。詳しくは→ ([多汗症](#))